

第 1682 回（6 月 18 日）

農業労働力の動向

— 1995 年農業センサス分析① —

茂 野 隆 一

誰が将来の日本農業を担うのか、そしてその「担い手」をどのように育成し、彼らが活躍できるような条件をいかに整備していくかが、農政にとって焦眉の課題となっている。こうした課題に答えていくためには、将来の農業構造を的確に展望することが不可欠である。

本報告では最近公表された 1995 年農業センサスデータをもとに、現在の農業労働力の現状を明らかにし、将来における農業就業構造の展望に必要な基礎的知見を提供することを目的としている。

なお分析にあたっては、特に農家世帯員の就農率がどのように決定されるのかに重点を置いた。農業就業構造の予測にしばしば用いられるコーホート法は、農家人口についてはきわめて精度の高い予測が可能であるが、農業就業人口の予測の精度は比較的低い。これは就農率の予測が困難なためであり、就農率がどのように決定されているかを明らかにすることが求められているからである。

1995 年農業センサスにおける農業労働力関連の特徴的な動きとして、急速な高齢化の進展が挙げられる。かねてから農業労働力の高齢化は指摘されてきたが、最近 5 年間に於いてそのスピードはさらに高まった。

その背景には、高齢者の就農率の上昇がある。とくに 60 歳代前半の男子についてはこの傾向が顕著に見られ、青壮年層の農業労働力の減少による影響を緩和する役割を果たしている。こうした現象は作物別には稲作、地域的には近畿、山陰、山陽といった従来から後継者問題が顕在化していた経営類型、地域に顕著にみられる。なお、時系列的にセンサスデータを分析した結果、こうした 60 歳代

前半の男子の就農率が高まる現象は 1980 年代に入ってから始まったことが明らかになった。

一方、農業労働力に新規に参入してくる若年層は、数量的には依然として低迷している。ただし、従来から注目されてきた新規学卒者に代わって、20 歳代前半くらいから農業に就業する人の数が次第に増えてきていることは注目すべきである。こうした傾向は 1970 年代後半からみられたが、近年とくに増加する傾向にある。